

期間が延長し、現在国内では累計10万人をこえる小児がん経験者（CCS）が存在すると推測される。CCSは晩期合併症の発生割合が非常に高く、加齢とともに増加することから長期フォローアップは極めて重要である。一方、成人となったCCSの長期健康管理の継続においては移行先の選定が難しいなど多くの課題がある。

小児がん治療後の長期健康管理に総合診療医が関わる福島モデルを構築する「チカイシ」プロジェクトを開始した。CCSが大学病院と住まいの近くの医療機関を活用して長期健康管理を続けられることを目指している。安心感を持って連携を進めるには情報共有を密にすることが重要と考え、大学病院-CCS-総合診療医でのオンライン面談を検討している。今後9月を目処に、長期フォローアップ外来を受診したCCSに対して地域連携についての意向を伺ってコーディネートを開始する予定である。

<特別講演>

「腫瘍循環器学（Cardio-oncology）の理論と実践—小児・AYA世代がんを中心に」

福島県立医科大学 循環器内科学講座 教授

石田 隆史

小児がんの治療の進歩によりその予後が劇的に改善してきたことにより、様々な晩期合併症が小児がんサバイバー（CCS）の予後とQOLを左右する重要な問題となっている。中でも心不全、冠動脈疾患や脳卒中などの心血管疾患のリスクはCCSにおいて極めて高く、心血管死亡率のリスクは一般人の約8倍で、小児がん発症後約30年でがんの再発や二次がんによる死亡率を超える。その原因には、化学療法、放射線治療に加えてその後の生活習慣などの影響が考えられている。したがって心血管疾患の予防と治療はCCSの長期的なフォローアップにおける重要な課題である。この観点から我々は、当院小児腫瘍内科と連携し、CCSの心血管病のスクリーニングおよび治療をおこなってきた。同時にCCSから末梢血単核球を採取し、そのDNA損傷の定量をおこなっており、小児がんサバイバーの長期フォローアップにおける有用なバイオマーカーとしての可能性を検討している。